

『社会言語科学』特集論文の募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」(エディター: 西阪仰, 串田秀也, 熊谷智子)の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。これまで特集の投稿要領と異なる部分がありますので、要領及び趣旨の文をよく読んだ上で、投稿してください。

1. 論文の最終投稿期限 2007年6月20日(水)(消印有効)

論文は投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることを勧めます。

なお、刊行時期までに採用とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

2. 論文の投稿先:

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19

(株)国際文献印刷社内 社会言語科学会編集委員会

投稿に際しては、執筆要項に定めた原稿を、封筒の表書きに「特集投稿論文在中」と明記した上で編集委員会宛に郵送すると同時に、下記の編集委員会のメールアドレスに論文の副本(著者名所属が入っていない原稿)のファイルをPDFファイルで送付してください。

edit06 AT jass.ne.jp

(ATと前後の空白を、@に置き換えてご利用ください。)

ただし、郵送された紙版の原稿の確認をもって正式の受領とさせていただきます。

なお、投稿についての問い合わせは事務局では対応できません。投稿要領や査読結果等、『社会言語科学』の編集に関する問い合わせは、電子メールで編集委員会宛にお願いします。

3. 特集の趣旨

特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」

特集エディター: 西阪仰, 串田秀也, 熊谷智子

相互行為の実際の展開において、言葉は相互行為参加者たち自身によりどのようなやり方で用いられているのか。『社会言語科学』10巻2号では、この間に具体的に取り組む研究を集め、特集を組みたいと考えています。単に相互行為のなかで生じた言語使用を研究対象にするのではなく、言語使用を相互行為のなかに位置づけて解明することを狙いとした特集です。1960年代に、社会学者であるハーヴィ・サックスは、(当時ソニーが開発した磁気テープに)「自然に生起する相互行為」を記録し、それを繰り返し検討しながら、相互行為の組織のために相互行為参加者たちが利用する様々な「仕掛け」を明らかにしようとした。これが会話分析の始まりです。会話分析は、確固とした思想と、統制された分析技法からなる、一群の研究、もしくは研究態度です。今回の特集では、この会話分析の基本的な構えを何らかの形で引き受けていきたいと思っています。しかし、とくにこの特集へ広く寄稿を呼びかけるにあたり、この思想と分析技法に必ずしも厳格にこだわるものではありません。言語使用と社会に関心のある多くの人にとって、読むに値するものが、この特集号に配列されること、これこそが何より重要と考えるからです。

出発点として、次の視点を共有できればと思っています。それは、会話分析と距離をとり続けた人物の提示した視点です。社会学者アーヴィン・ゴッフマンは、1960年代の後半、言語使用を

社会的な現象と捉えようとする言語学者・人類学者たちに向けて、「無視された状況」という小さい文章を書きました。そのなかで、「発言の本来の住処は、発言が必ずしも産出されないような、そういう場所である」と述べています。「発言の住処」とは、端的に相互行為です。発言のない相互行為を私たちは、容易に想像することができます。言語使用の研究であっても、それをあくまでも相互行為の組織という視点に結びつけること。これを、共通の出発点としつつ、この特集号に対し次のような論考が寄せられることを期したいと思います。

1. 「自然に生じた」相互行為（おしゃべり、診察室、教室、生放送の番組など、なんであれ）の実際の録音録画にもとづく経験的研究であること。「自然に生じた」というのは、相互行為機会の設定以降、録音録画の器材以外の介入が一切ないという意味です。たとえば、録音録画のために人を募って会話をしてもらおうというようなことも、さらに場合によっては、話題を指定することもあるかと思います。とりあえず、このような相互行為も含めていただいてよいと思います。ただし、そのさい、調査者があらかじめ想定していること（話題の内容、性別などの社会的属性など、なんであれ）を、実際に録音録画のなかで起きていること（より精確には、相互行為参加者が実際に行なっていること）に係留することなく、分析の前提とするようなものは除外したいと思います。
2. 相互行為断片を書き起こしたものが論文のなかで提示され、論文の主張がそこに明確に根拠付けられていること。二つの含意があります。第一に、個々の相互行為がどう行なわれているかを、必ず明らかにしてください。たとえば、言語使用上の観察されるパターンと話者の社会的属性との相関関係を統計的に明らかにしようとする論考は、今回は除外したいと思います。第二に、相互行為の細部にあることを見逃さないようにしてください。
3. 相互行為がどのように組織されるか、または相互行為のなかで発言がどのように組織され（相互行為における言語使用）について明確な主張が提示されていること。単に個々の相互行為の分析だけではなく、主張を提示するようにしてください。そして、その主張をその分析に、説得力のある形で根拠付けるようにしてください。
4. そして言うまでもなく、その主張は、オリジナルなものであると同時に、先行業績（社会科学、人文科学における）との関連で有意義なものであることが、明確に示されていること。

以上の観点にもとづく論考を、広く呼びかけたいと思います。